

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520434

研究課題名（和文）

アブハズ語のデータベースに基づく文法記述の研究

研究課題名（英文）

A Grammatical Description of Abkhaz Based On Databases Of the Abkhaz Language

研究代表者

柳沢 民雄 (YANAGISAWA Tamio)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：80220185

研究成果の概要（和文）：

アブハジア人のインフォーマントより収集した一次資料に基づいて、アブハズ語文法を記述した。基本的なデータベースとして用いたのは、すでに本研究者が出版したアブハズ-英語辞典である『Analytic Dictionary of Abkhaz』（ひつじ書房、2010）である。記述されたアブハズ語文法の内容は、音韻論、形態論、統語論であり、特に詳細に記述した所は動詞形態論である。これを英文にしてまとめ、平成24年度の科研費・研究成果公開促進費「学術図書」に応募し内定を得た。平成25年2月に出版予定である。

研究成果の概要（英文）：

The aim of the present study is to describe the Abkhaz language. Based on the material collected mainly from my Abkhaz consultant, I have written a grammar of Abkhaz. The intended purpose is the same as that of my *Analytic Dictionary of Abkhaz* (Hituzi Syobo Publishing, 2010), being an exhaustive description of the Abkhaz morphology, in particular the verbal morphology. The grammar comprises phonology, morphology, syntax, and texts. It will be published with the help of Grants-in-Aid for Scientific Research (No. 245071) in 2013.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：アブハズ語、カフカース諸語、文法、データベース

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初までに行われていたアブハズ語研究は、アブハズ語の動詞形態論の研究（平成12-13年度と平成14-15年度の科学研究費補助金、それぞれ基盤研究(C)1と(C)2）、アブハズ語テキストの分析と基礎語彙集の作成（平成16-17年度の科学研究費補助金、基盤研究(C)）、及びアブハズ語のデータベース構築と辞書作成（平成18-20年度の科学

研究費補助金、基盤研究(C))である。これらの研究は全てアブハズ語の母語話者より調査収集した一次資料を基にして行ったものである。これら一連の調査によって、およそ動詞1200語、その他の語彙およそ5000語を含む辞書を編纂した。この辞書の動詞の項目においては、少なくとも次の形態を必ず記載した：(a)終止形と非終止形（関係節や疑問文を作る際に基本となる形）の現在時制

とアオリストのクラス・人称活用形（肯定と否定の両形）、(b)命令形の2人称単数と複数形（肯定と否定の両形）、(c) *absolutive*（ロシア語の副動詞に相当する形）の肯定形と否定形。また基本動詞およそ 300 語に関しては、全てのテンス・アスペクトの人称形、各文法範疇の肯定と否定形（アオリスト形で代表）を出来る限りインフォーマントより調査し記載した。名詞については、アブハズ語は曲用変化がないため複数形のみを調査し記載した。これらの記載に際しては、出来る限り音声の正確さを期するように努めた。例えば、挿入母音であるシュアー *schwa* の出沒、全ての語形におけるアクセント位置、有声・無声子音のヴァリエーションなどの記述に心懸けた。

他方、アブハズ語の民話テキストと神話テキストを中心に用例を収集し、これを各形態素に分析し、英語の翻訳を付けてデータベース化した。この成果の一部は平成 16-17 年度の科学研究費の研究成果報告書である、*Analysis of Texts and a Basic Lexicon of the Abkhaz Language*. 1-562. 2006 として、また *Abkhaz Text (1)-(6)* として発表した。これが研究開始段階でのアブハズ語のデータベースの内容である。

2. 研究の目的

研究の目的は、今まで集積したアブハズ語のデータを基にして、悉皆的なアブハズ語文法を記述することである。特に今まで詳細に記述されることがなかった複統合的特徴を表す動詞複合体の形態に重点を置き、そのアクセント移動の記述までも含めた網羅的な記述を目指した。

目的として設定したアブハズ語文法の内容は以下である：序論（アブハズ語研究小史、文字）、音韻論（子音と母音、アクセント）、形態論（名詞、代名詞、形容詞、数詞、副詞、動詞、派生語の形成）、形態統語論（使役、法、再帰、抱合、疑問の各形態の派生方法）、統語論（様々な節の表現、発話小辞、動詞内接辞による空間表現、繫辞構文、相互構文、絶対構文、他動性、倒置構文、様々な動詞内接辞の役割、等）。このような内容のアブハズ語文法をつくることにより、アブハズ語のテキスト解釈のための基本的リファレンスを提供することを目指した。さらに文法と辞書とテキストの3点を提供するために、この文法にはアブハズ語の神話テキストおよび民話テキストを付けることにした。本研究者の *Analytic Dictionary of Abkhaz*（ひつじ書房、2010）とこのアブハズ語文法を提供することにより、アブハズ語の総合的な研究の完成を目指した。

3. 研究の方法

研究方法は、今までアブハジアのインフォー

マントから調査収集したアブハズ語のデータベースを基に、標準アブハズ語文法を記述することである。具体的には音韻論から統語論に亘り、次の項目を中心にデータベースから例を取りだして記述する：

(1) 音韻論：

母音シュワーの現れをアクセントと子音結合との関連で調査する。長音の開母音の音韻的な位置を決める。アブハズ語アクセントの法則（「*Spruit* の法則」）の有効性とその類型論的な意味を他の音調言語を参考にして調べる。子音音素の出現頻度とその類型論的な関係を調べる。

(2) 形態論：

名詞については、複数形と合成語、およびそれらのアクセントを調べ、アブハズ語アクセントの *Spruit* の法則が名詞派生語に有効かを調べる。代名詞は人称代名詞とその他の代名詞を記述する。後者は3つの直示系に分けて記述する。形容詞は派生方法と接尾辞の種類に分けて記述する。数詞は個数詞と順序数詞を記述し、個数詞と名詞の結合方法を記述する。動詞は最も詳細に記述する。まず動詞に付加する人称、クラスを表す接頭辞を記述する。さらに動詞が取り得る基本的なクラス・人称接頭辞によって、動詞を A から H までのクラスに分けて、各動詞のパラダイムを記述する。この際に動詞のアクセントパラダイムを3つに分けて、さらに動詞を下位分類する。

(3) 形態統語論：

使役、法（命令法、叙想法、願望法、可能法、非意志法、実相法）、ヴァージョン、再帰、不安定動詞、抱合、疑問についてその派生方法と用法を記述する。

(4) 統語論：

節（時間を表現する節、条件節、原因節、譲歩節、関係節、間接陳述節、目的節）、発話小辞、場所を表現する動詞接頭辞、繫辞構文、相互構文、絶対構文、動詞の他動性、倒置構文、動詞に付加する接頭辞的不変化詞、動詞複合体内のその他の接辞、について節や構文の作り方とその用法を記述する。特に複文に関して、テンス・アスペクトの観点からも記述する。

(5) テキスト：

神話テキストと民話テキストをラテン文字に転写し、形態素に分析し、そこにグロスを付け、英訳をつける。さらに詳細な文法的な注釈をつける。

4. 研究成果

アブハズ語のデータベースを基にしてテキストを含めたアブハズ語文法をまとめた。具体的な成果は以下である：

(1) 序論：

アブハズ語研究史の概説と文字の特徴を纏めた。文字には音声的転写（IPA）、音韻的転

写と翻字、名称をつけた。

(2) 音韻論：

アブハズ語の音韻体系をまとめ、シュアーの出没の条件を明確にし、それを法則の形で提起した。長音の a の音韻的な位置を確定した。アクセントについては、動詞に3つのアクセントタイプ (APa, APb, APc) を認めた。さらにアブハズ語のアクセント法則である「Sprui の法則」の有効性を名詞と形容詞について調査し、有効な法則であることを示した。補説として、アブハズ語のアクセントの音調起源についての仮説を他の音調言語と関連させて述べている。

(3) 形態論：

形態論は大きく2つに分けて記述した。動詞以外の品詞と動詞である：

名詞については、アブハズ語には格変化がないので、複数形、クラス、派生の形態を中心に記述した。合成語については語根に付く接尾辞を網羅的に調査し、そのアクセント素性を調べた。そして Sprui の法則がここに当てはまるかを調査して、それを記述した。代名詞については、人称代名詞、所有代名詞とその接頭辞、再帰代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、および代名詞的形容詞を記述した。形容詞については、形容詞を非派生形容詞、接尾辞による派生形容詞の2つに分け、その用法を記述した。さらに関係詞化された形容詞の形態を記述した。形容詞のアクセントにおいても、Sprui の法則が当てはまるかを調査して、それを記述した。副詞については、副詞を単純副詞と派生された副詞の2種類に分け、後者の派生過程を中心に記述した。最後に数詞については、個数詞と順序数詞と倍数詞を記述した。個数詞は人のクラスと人以外のクラスに分け、名詞との結合の方法を調査し、これを記述した。

動詞については、形態論の中で最も詳細にその形態を記述した。まず動詞に付加する接辞(クラス・人称接頭辞と動詞前接辞 preverbs、および様々な機能をもつ接尾辞と接頭辞)を記述した。その次に、動詞が取り得る基本的なクラス・人称接頭辞と動詞の状態形と動態形によって、動詞を A-1 から H のクラスまでに分け(これは G. デュメジルの分類を一部修正したもの)、各クラスのパラダイムを記述した。このパラダイムを記述するに際しては、動詞のアクセント型を3つに分け (APa, APb, APc)、これを範例とともに記述した。またこれらの記述に際しては、終止形と非終止形、およびそれらの肯定形と否定形を必ず記述した(各時制形もまた同時に網羅的に記述することを心懸けた。特に全ての範例の見本としたのは、現在形とアオリスト形である)。このようなアクセントを含めた動詞の詳細な記述は斯界において他に例がなく、本研究が初めて行ったものであり、オリジナリティ

を主張することができる。

(4) 形態統語論：

使役、法(命令法、叙想法、願望法、可能法、非意志法、実相法)、相 version、再帰、不安定動詞、抱合、疑問について、それらの派生方法と用法を記述した。これらの記述も単なる派生方法を記述するだけでなく、動詞の A-H までの各タイプにその派生方法を具体例を挙げながら記述した。範例としてそれぞれの現在形とアオリスト形を挙げた。また派生の際のアクセントの移動もできる限り調査し、それを記述した。

(5) 統語論：

アブハズ語の節の構造を次の7つにまとめて記述した。1. 時間を表現する節：9つの動詞接辞(例えば、“when”, “while”, “as soon as”, “until”, “since”, “every time”, 等の意味を表す接辞)を用いる節を記述するとともに、動詞のテンス・アスペクトについても調査し、記述した。2. 条件節：単純な条件節と非現実の条件節を記述した。3. 原因節、4. 譲歩節、5. 関係節：関係代名詞的な機能を果たす動詞複合体と関係副詞的な機能を果たす動詞複合体を記述した。6. 間接陳述節、7. 目的節。

発話小辞(日本語の「...と(言った)」に相当する発話の引用を示す小辞)、場所を表現する動詞接頭辞(一部の動詞において、名詞に位格的なマーカ―が現れず、動詞複合体内部に現れる位格的なマーカ―)、動詞に付加する接頭辞的不変化詞(民話テキストにおいて多用される、行為の強調を表現する小辞)について、それらの例を民話テキストから引用しながら、記述した。

さらに次の構文を記述した：繫辞構文、相互構文、絶対構文、倒置構文。相互構文については2つの相互マーカ―をもつ構文を記述した。絶対構文については、肯定形と否定形を記述するとともに、主節と従属節の時間的な関係(同時に行う行為か継起的に行う行為かという関係)に分けて記述した。また統語的ピボットも調査した。倒置構文については、この構文で用いられる動詞を調査し、その他動性を調べた。これらの構文(及びその他の形態的特徴)からアブハズ語動詞の他動性を決める基準を提示した。最後に動詞複合体に付加するその他の接辞(例えば、道具を表す接辞)を記述した。

(6) テキスト：

神話テキストと民話テキストをラテン文字に転写し、形態素に分析し、そこにグロスを付け、英訳をつけた。さらに詳細な文法的な注釈を付けた。ここで文法分析されている方法は、「アブハズ語文法」において行った手法である。文法的な注釈は初学者がテキストを正確に解釈することを心懸けたためである。

これらを「A Grammar of Abkhaz」として文法書の形にまとめた。これを平成24年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費「学術図書」に応募し、内定を得た（課題番号245071）。平成25年2月にひつじ書房より出版の予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. Tamio Yanagisawa, Abkhaz Text (10): The Man Who Carried Out Good Deeds For A Dead Man. (I) *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 33-2. 157-172. 2012. (査読無)

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/33-2/yanagisawa.pdf>

2. Tamio Yanagisawa, Abkhaz Text (9): Lake Rits'a. *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 33-1. 141-155. 2011. (査読無)

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/33-1/yanagisawa.pdf>

3. Tamio Yanagisawa, Abkhaz Text (8): Ts'an. *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 32-2. 91-100. 2011. (査読無)

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/32-2/yanagisawa.pdf>

4. 柳沢民雄「ロシア語の文の成分」国文学

解釈と鑑賞, 75-7. 135-140. 2010.

5. Tamio Yanagisawa, Abkhaz Text (7): How the king's daughter turned into a boy. (II) *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 31-1. 193-219. 2009. (査読無)

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/31-1/yanagisawa.pdf>

[図書] (計2件)

1. Tamio Yanagisawa, *Analytic Dictionary of Abkhaz*, ひつじ書房. xxxvi + 599. 2010. (科学研究費補助金(研究成果公開促進費)学術図書, 課題番号215068)

2. 柳沢民雄「アブハズ語」『ニューエクスプレス・スペシャル ヨーロッパのおもしろ言語』(町田健監修)白水社. 8-27. 2010.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳沢 民雄 (Yanagisawa Tamio)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号: 80220185

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし